

現代青年の生き方の形成における個人的価値の構造

飯沼 和希

1. 問題と目的

生き方の定義

人は自己の置かれた社会的状況において、その人の考え方や決断によって、ある特定の生活パターンを日々積み重ねている。それを通じて考え方や決断に応じた人生が形成されていくと考えられる。こうした人生の形成は個人の責任のもとで行われる選択によってなされるものであり、その意味において、人は基本的に、どのような生き方を選択しどのように生きるにしても自由である(梶田, 1990)。しかしながら、このような真に自由な「生き方」の選択は、伝統的な社会的意識、個人を捕らえる他者のまなざしによって困難である(見田, 1979)。われわれは少なからず自身が所属する社会に支配的な言説やパースペクティブに従っているうちにおいて、自由に「生き方」を選択しているのである。

マクロな視点では、個人の行動に関与する他者は社会的な言説や他者のまなざしと呼ばれるものであると考えられるが、よりミクロで心理学的な視点では Mead(1934)の「me」が挙げられる。Meadによれば自己(me)とは自分の行動や意志決定するときに採用される他者の態度が組織化されたものである。meは他者と関わった際の自分の行動に対する他者の反応を内在化させ、これまでに内在化された複数の他者の態度を役割と関係に基づいて組織化する。組織化された他者の態度の集合は「一般化された他者」呼ばれ、一般化された他者は共同体における「常識」や適応的な行動・考えとなる。考え、行動する際には、特定の状況において内在化され一般化された他者との内的なコミュニケーションを経て表現されるのである。

一般化された他者や社会的なパースペクティブに従って生きる人間の典型例は、Riesman(1950)の他人指向的な人間や Rifton(1969)のプロテウス的人間に見ることができる。これらの人間は他者の行動や意志を準拠棒として個人の行動を形成していくのであるが、個人に関与するパースペクティブは必ずしも一つではなく、さらに一貫しているとも限らない。すなわち、個人の「生き方」は一貫しているというよりも流動的なものとして捉えることができる。

【 研究ノート 】

このような人間の人生を流動的であると見なす流れのなかでは、自己は相対化されるために人生の主体たり得ないとするものがある(Butler, 1997; Gergen, 1998)。しかしながら、そうした流れが主張する言説の反省性や生成性を生み出すものは自己以外であるとは考えられず、そのためには主体である自己を前提とする必要がある。Mead は自己が他者との関係であるとともに、自己自身との関係でもあると述べている。人は「me」に対応する主体としての「I」を構成し、「I」は「me」に組織化された反応群とそれに対応する表現に含まれない、新たな表現を内的コミュニケーションによって生み出すものであるとしている。すなわち、人間のもつ創造的な側面は「I」がもつものである。Gergen や Butler は関係論的な視点から「I」もまた社会的かつ言説によって構成されるのであるのから、人間が主体的であるとは言えないと主張する。しかしながら、自己についての議論において、この考えについてはパラドックスが生じる(浅野, 2001)。彼らは自己物語によって自己が構成されると述べ、物語の流動性や複数性、社会的な構成から主体的な側面を排除するのであるが、語りが自己言及の形となる自己物語においては、語る主体を前提とせざるを得ないという循環が生じる。これによって主体が存在しないと主張することもできるのであるが、単にそこに主体が存在しないと結論づけてしまうと、前提を失った物語やそこから生じる社会的関係が土台を失うことになり、存在も疑われることになる可能性がある。すなわち、すべての土台となる出発点たる真の主体は存在しないかもしれないが、社会的関係を創造していくための主体は存在し得るとしておくほうが妥当であると考えられる。すなわち、彼らが言及する関係の変化こそが、創造的な主体によって成されるものであるようにも考えられるのである。

特に、個人の現象的な場において自覚されるうちにおいては、「me」が社会的に構成されているとしても、「I」は十分に存在しているのである(梶田, 1998)。

これまで、行動や思考のために参照される「me」が社会的に構成され、それが個人の準拠枠としての役割を担うこと、「I」は創造的な性質に関係する限りにおいて存在し得ることを記述してきた。これらを踏まえて、本研究では、「生き方」を「人生を形成し方向づける、主体性をもとに社会的に構成されたパースペクティブの集合」と定義する。

アイデンティティの形成と「生き方」の形成

「生き方」の選択について特に青年期において大きな変化が生じるとされる。ライフサイクル論を唱えた Erikson(1959)によれば、青年期は子どもとしての最終段階であり、アイデンティティ形成の課題が顕在化する時期である。そして、これはそれまでの一方向的に子どもから大人へと変わりゆく、社会的な人間へと変化していく発達の段階から、個性的な個人としての「わたし」を形成していく段階へ移行する過渡期であり、多様化した激しく変化していく人生上の可能性から自身が辿る暫定的な生き方の選択を迫られる次期でもある(溝上, 2008)。青年期で課題となる個人の「生き方」の形成は、アイデンティティ形成の過程で成立すると考えられる(梶田, 1998)。アイデンティティとは、“自分自身との永続的な斉一性(自己斉一性)と、ある種の本質的な性格を他者と永続的に共有すること、との双方を含む相互関係”とされてきた(Erikson, 1959 小此木訳 1973)。これは自己に同一化され、形成されてきた自我と、他者や社会と相互に関係し合うことによって社会の中に位置づけられた自己の両者の統合と再生を目指すことによって形成される(Erikson, 1968)。それらは、理想的な自己と自我理想の埋まることのないズレの調整として説明される。理想的な自己は、社会的な規範によって形作られる、超自我的な性質を持ったものであり、自我理想は現実の中で調整される、未来における現実的な自己の展望を定義するものである。すなわち、アイデンティティを形成することは、理想的な自己と自我理想にズレがあることを認識しながら、そのズレを調整し、ある時点より前の自分から新たな自分へと自らを作りかえていこうとすることである(西平, 1993)。

このような統合は社会的関係のなかで進んでいく。認識されるズレは自身が所属する、あるいは参入しようとする集団や関係のなかで受け入れられるような形で調整され、特定の社会的関係のなかで表出することが許容されるような自己へとつくり変えられるのである。Grotevant(1987)は、複数の領域における探求に注目したアイデンティティのプロセスモデルを提案した。このモデルでは「パーソナリティ」「認知能力」「現在のアイデンティティ」の個人的特徴と、文脈(「文化/社会」「家族」「仲間」「学校/職場」)、各領域のアイデンティティ形成プロセスの相互作用が想定され、アイデンティティの形成が社会的な文脈からは切り離すことができないことが示されている。

【 研究ノート 】

社会的関係において形成されるアイデンティティは、社会化と個人化の発達として理解することができる(Neumann, 1953)。社会化とは、社会や他者に志向しながら回りに適応していく過程であり、個人化とは、自己の内面を志向しながら自己を確立していく過程である。すなわちアイデンティティは、社会化と個人化の 2 つの志向性が相互補完的に作用することで発達していく過程であると捉えることができる(梶田, 1980)。これらの 2 つの志向性を伊藤(1993a)は社会志向性・個人志向性とし、それぞれの機能を記述している。社会志向性は社会化に対応し、他者あるいは社会の規範への志向性であり、社会の中でうまく適応していくための特性である。個人志向性は個人化に対応するものであり、自分自身の内的基準への志向性であり、自分自身の個性を最大限に発揮できるという点で、自己実現に近い特性を表す。社会志向性・個人志向性は、両者が増加するだけでなく、バランスが良いことが適応的であるとされる(伊藤, 1994)。それは社会化と個人化を人格の二面性とし、それを認めない一面性の強さと自尊感情の大きさによって検討され、一面性が低い者、すなわち、二面性を認める者は個人志向性・社会志向共に加算的に作用し、自尊感情も高かった。

社会志向性・個人志向性もまた、理想自己と関連を示し、社会志向性は社会的な理想像へと志向するものであり、個人志向性は個人的な理想像へと志向するものである(伊藤, 1993b)。社会的な理想像および個人的な理想像を、それぞれ理想的な自己および自我理想として考えるならば、社会化・個人化の発達および両者のズレを調整しようとする作用は、アイデンティティの形成として捉えることができる。

「生き方」形成における価値への志向性

このようなアイデンティティの調整を経て形成される「生き方」を左右するのは価値への志向性であると推測される(Hitlin, 2003)。アイデンティティの形成が「生き方」を形成するための核であるとすれば、ここで関与する価値への志向性は、社会が志向する価値と個人が志向する価値に分類される。さらに、個人の志向性には、理想的な価値と現実的な価値が存在すると考えられる。個人が納得のいく「生き方」が見出されるのは、社会と個人の価値、および理想と現実の価値の統合が目指されるときであると推測される。

【 研究ノート 】

価値についての研究には、理念的に構成した価値を相互独立的に類型化するものと、個人の持つ一般的な価値を抽出して構造化するものがある。Spranger(1921)の精神的作用による6つの価値、Allport, Vernon & Lindzey(1951)の価値の研究、Morris(1956)の「好ましい13の生き方」、Rokeach(1974)の「手段価値」と「目的価値」の研究などは、前者の立場の研究である。後者の立場からは、Schwartz(1992, 1996)の56価値、10類型の動機づけによる価値構造や、Schwartzの価値から36項目を用いて、個人アイデンティティへの影響を検討したHitlin(2003)などがあり、一般に広くみられる普遍的な価値の特性を記述し、構造を明らかにしてきた。しかしながら、これらの研究が汲み上げた価値体系には、個人が重要だとしている、生き方に影響を与えるような価値を必ずしも含んでいない。すなわち、個人の持つ対人的な文脈と自己の相互調整によって形成される「生き方」の核として、価値をとりあげるのであれば、上述のような普遍的な価値ではなく、個人に重要だとされる固有な価値を対象とする必要がある。

個人的な価値を対象とした研究には、生き方の規定因を検討した溝上(1995)や、個人の価値パターンと両親の価値観の認知について検討した栗山・大井(2012)などがある。両者とも個人的価値を重要としている要因を検討しているが、特に、栗山らは重要な他者についての個人の主観的側面を重視している。このようなアプローチは、社会と自己の相互調整的に形成される「生き方」を扱うにあたって重要であるが、栗山らのアプローチに、個人と社会に対する主観的な統合の視点を加える必要がある。そのためには、社会志向性・個人志向性のような客観的な指標とともに、個人の主観的な語りを分析することが有効であると考えられる

目的

本研究では、①現代青年が重要だとしている価値の構造を明らかにし、②社会志向性・個人志向性、重要だとしている価値が、青年の生き方にどのように影響しているのかを検討する。また、③青年の重要だとしている価値と生き方が、どのような文脈で語られるのか、特に、社会的関係および内的関係の統合について検討する。

2. 研究 1

現代青年は生きていくにおいて、どのような価値を重要だとしているのかを明らかにし、その構造について検討する。そのために、まず調査 1 で青年の価値項目を抽出し、調査 2 では、それらの項目を用いて生き方の有無と、社会・個人における理想と現実の価値およびそのズレを測定することによって、現代青年の価値を構造化する。

価値測定の手法

価値を測定する方法には、設定した価値への反応および順位をつけさせるものと、標準化された尺度を使用するものがある。前者を採用した研究には、Rokeach(1974)、小学生とその両親を対象とした Perron & Perron-Borrelli(1969)、都筑(1984)、生き方の規定因を探索的に調査した溝上(1995)が挙げられる。価値測定のために作成された尺度には、Spranger の類型をもとにしたものとして、Allport Vernon Test (Allport, et. al., 1951)、青木(1970)の人生観尺度、価値志向的精神作用尺度(酒井, 1999)がある。また、Morris(1956)の 13 の生き方尺度、それをもとにした、林・岡村(1966)の価値観尺度、人生をいかに生きるべきかを測定した、辻岡・村山(1975)の人生観尺度などがある。これらは項目分析および因子分析を用いて構造を検討したものであり、測定の精度も高いものが多いが、この手法で作成された尺度では、マイノリティの価値や個人差の大きい個別の価値を扱った項目ははじかれることになる。価値観・人生観などは個人差が大きいと考えられるため、実際の価値を捉えることができていないと推測される。そのため、本研究では価値カテゴリーを示した項目に順位をつける手法をとることにする。

調査 1

調査 1 では、青年が重要だとする価値を抽出するために探索的な調査を行い、調査 2 で使用する項目を選定する。

調査対象 私立 A 大学の生徒 52 名を対象とし、研究者の以来に同意した者に回答させた(平均年齢 20.7 歳, SD=0.56)。その内、男性は 21 名(平均年齢 20.9 歳, SD=0.56)、女性は 31 名(平均年齢 20.6 歳, SD=0.56)であった。また、生き方を具

【 研究ノート 】

体的に想像することのできる者は 17 名(男性 9 名,女性 8 名)であり,できない者は 35 名(男性 12 名,女性 23 名)であった。

調査実施時期 2014 年 10 月に行った。

調査内容 次の 4 つの内容を含む質問紙を作成し,調査を実施した。①フェイスシート：性別・学年・年齢の記入を求めた。②“自分にとって納得のいく生き方を具体的に想像することができるか”を“はい”か“いいえ”の 2 件法で回答させた。③①で“はい”と回答した者のみに,生き方の具体的な内容を自由記述で回答させた。④現在,自分が生きていくうえで重要だと思っていることを 3 つ,自由記述で回答させ,それぞれに順位をつけて記入させた。

データの処理 青年が重要とする価値を概観するために,回答された価値を生き方の有無,価値の順位に関係なくカテゴリーに分類した。その後,調査 2 で用いる項目の選定を行った。

結果

価値のカテゴリー化

研究者と社会科学系の大学院生 2 名と共に,回答された,生きていくうえで重要だと思う価値を,生き方の有無,価値の順位に関係なくカテゴリーに分類した。カテゴリー化は,より具体的なカテゴリーから,より大きなカテゴリーへと,段階的に抽象度を上げる手順で実行した。①具体的な価値を示すと考えられる小カテゴリーを設定し,②ある程度まとまっているが,具体的な内容

表 1. 個人的価値のカテゴリー

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー
人との関係の持ち方	他者を思いやる	他人を批判しない
		他人との関係を大事にする
		周囲の人を大切にする
		平等に接する
		コミュニケーション力
重要な他者	重要な他者(家族・友人・恋人など)	人を疑うこと
		感謝すること
		家族
		異性との関わり
		友人
自己中心性	自分のやりたいことができる	大切な人との時間
		遊び
		趣味
		自分のやりたいことをする
		生きがいがあること
楽しさ・幸福感	楽しさ・幸福感	楽しく生きる
		笑顔
		幸せだと感じる
		生活の安定
		やりたい仕事をする
経済的生活	仕事	仕事
		お金
		健康的な体
		寝ること
		食すること
心身の健康	心身の健康	感情
		自分の時間
		自分を大切に
		自分を見失わない
		自分の意見をもつ
自分らしい考え方	自分の意志	他人に流されない
		試行錯誤
		考えること
		客観視
		あきらめ
自立	自立	1人でも生きることができる
		自分で考えて行動する
		嫌なことから逃げない
		目標をもつこと
		向上心
積極的活動	向上心	新しい知識を得る
		挑戦すること
		挑戦
		努力
		責任
規律	正しさ	責任
		正しさ

【 研究ノート 】

を示すと考えられる中カテゴリーに分類し,③複数の中カテゴリーが示す抽象的な大カテゴリーを構成した。その際,①示すものが非常に広範囲であるもの,②具体的すぎて意味を読み取る際に推測によるところが大きくなるものを除外した。カテゴリー化の結果,11 の大カテゴリー,29 の中カテゴリー,45 の小カテゴリーが抽出された。得られたカテゴリーを表 1 に示した。

項目の選択と追加

「生き方」は,現在までのアイデンティティやパーソナリティなどの個人的特徴と,個人が実際に接触し経験する具体的な現実とが相互に調整し合うことによって形成される。そのため,個人的価値もまた具体的な内容である必要があると考えられる。したがって,調査 2 で使用する項目は最も具体的なカテゴリーである小カテゴリーを採用した。

さらに,Morris の 13 の生き方,Schwarz の価値構造,栗山・大井(2012)を参考に,現代青年の価値として回答が予想される,大カテゴリーの枠を逸脱しない程度に作成したもの 13 項目を加えた 58 項目を,価値項目として用いることにした。新たに作成した 13 の小カテゴリーを大カテゴリーごとに記述する。①「人との関係のもち方」の中カテゴリーに「他者からの疎外を回避する」,「その場に合わせる」,「他人との協力」を設定した。「他者からの疎外を回避する」の小カテゴリーは「目立たないようにする」,「他人の目を気にする」であり,「その場に合わせる」の小カテゴリーは「空気を読む」,「他の人に合わせる」である。「他人との協力」はそれがそのまま小カテゴリーとなっている。②「経済的生活」に,「社会的地位」,③カテゴリー「自己尊重」に「自分の利益」の小カテゴリーを加えた。これらの小カテゴリーは中カテゴリーも兼ねる。④「自分らしい考え方」に小カテゴリー「落ち着き」,「マイペース」を加え,それらは中カテゴリー「マイペース」に含まれる。⑤「積極的活動」に小カテゴリー「学習すること」を加え,これと既存の「新しい知識を得る」を含んだ中カテゴリー「学び続けること」を設定した。⑥「規律」の小カテゴリーには,「ルールを守る」,「自律」を追加した。

3. 今後の展望

調査 1 で得られた項目を用いて,生き方の有無,個人内における社会・個人の価

【 研究ノート 】

値およびそれぞれについての理想と現実の価値を測定することで現代青年の価値を構造化していく。調査 2 では、調査で用いた質問①が、多様な内容を想起させるために、回答を困難にさせたり、質問の意図から外れたりすることがあった問題を考慮し、生き方を測定する項目を複数設定することによって、測定の精度を高めることにする。

引用文献

- Allport, G. W., Vernon, P. H. & Lindzey, G. (1951). *Study of Values: A scale for measuring the dominant interest in personality* (3rd ed.) Boston: Houghton Mifflin.
- 青木孝悦 (1970). 大学生の価値類型 心理学研究, 41(2), 83-89.
- 浅野智彦 (2001). 自己への物語論的接近——家族療法から社会学へ—— 勁草書房.
- Butler, J. P. (1997). *The Psychic Life of Power: Theories in Subjection*. Stanford University Press. (佐藤嘉幸・清水知子(訳) (2012). 権力の心的な生——主体化=服従化に関する諸理論 月曜社)
- Erikson, E. H. (1959). *Identity and the Life Cycle: selected papers*. Psychological issues, Vol. 1. New York. International Universities Press. (小此木啓吾(訳) (1973). 自我同一性 誠信書房)
- Erikson, E. H. (1968). *Identity: youth and crisis*. W. W. Norton. (岩瀬庸理(訳) (1969). アイデンティティ——青年と危機 北望社)
- Gergen, K. J. (1999). *An Invitation to Social Construction*. Sage. (東村知子(訳) (2004). あなたへの社会構成主義 ナカニシヤ出版)
- Grotevant, H. D. (1987). Toward a process model of identity formation. *Journal of Adolescent Research*, 2, 203-222.
- Hitlin, S. (2003). Values as the core of personal identity: Drawing links between two theories of self. *Social Psychology Quarterly*, 66, 118-134.
- 伊藤美奈子(1993a). 個人志向性・社会志向性尺度の作成及び信頼性・妥当性の検討 心理学研究, 64(2), 115-122.
- 伊藤美奈子(1993b). 個人志向性・社会志向性に関する発達的研究 教育心理学

【 研究ノート 】

研究, 41(3), 293-301.

伊藤美奈子(1994). 性格特性の一面性と個人志向性・社会志向性との関連について 心理学研究, 65(1), 18-24.

梶田叡一 (1980). 自己意識の心理学 東京大学出版会.

梶田叡一 (1990). 生き方の心理学 有斐閣選書.

梶田叡一 (1998). 意識としての自己：自己意識研究序説 金子書房.

栗山容子・大井直子(2012). 日本人大学生の価値意識 発達心理学研究, 23(2), 158-169.

Mead, G. H. (1934). *Mind, Self, and Society*. Morris, C. W.(Ed)., University of Chicago. (稲葉三千男・滝沢正樹・中野収(訳) (1973). 精神・自我・社会 青木書店)

見田宗介 (1979). 現代社会の社会意識 弘文堂.

溝上慎一 (1995). WHY 答法による将来の生き方基底因 心理学研究, 66(5), 367-372.

溝上慎一 (2008). 自己形成の心理学——他者の森をかけ抜けて自己になる 世界思想社.

Morris, C. (1956). *Varieties of human values*. Chicago, Chicago Univ. Press.

西平 直 (1993). エリクソンの人間学 東京大学出版会.

Neumann, E. (1953). *Zur Psychologie des Weiblichen*. Rasser & CIE, AG, Zurich. (松代洋一・鎌田輝男(訳) (1980). 女性の深層 紀伊国屋書店)

岡村二郎・林 昌三 (1966). Morris の価値尺度の因子分析的検討 日本教育心理学会総会発表論文集 (8), 130-131.

Perron, R. & Perron-Borrelli, M. (1969). Contribution a l'étude gènètiqw des valeurs. in R. Zazzo et al., *Des garcon de 6 à 12 ans* PUF: Parris. pp.265-299. (久保田正人・塚野州一(訳) (1974). 学童の成長と発達 明治図書 pp.253-288)

Riesman, D. (1950). *The Lonely Crowd: A Study of the Changing American Character*. Yale University Press. (加藤秀俊(訳) (1964). 孤独な群衆 みすず書房)

Lifton, R. J. (1969). *Boundaries: Psychological man in devolution*. Davis, A.

- W., Deborah Rogers Ltd. (外林大作(訳). (1971). 誰が生き残るか 誠信書房)
- Rokeach, M. (1974). Change and stability in American value systems. 1968-1971. *Public Opinion Quarterly*, 38, 222-238.
- 酒井恵子・久野雅樹 (1997). 価値志向的精神作用尺度の作成 教育心理学研究, 45(4), 388-395.
- Schwarz, S. H. (1992). Universals in the content and structure of values: Theoretical advances and empirical tests in 20 countries. In C. Seligman, J. M. Olson, & M.P.Zanna (Eds.), *Advances in experimental social psychology*. Vol.25, (pp.1-65), San Diego: Academic Press.
- Schwarz, S. H. (1996). Value priorities and behavior: Applying a theory of integrated value systems. In C. Seligman, J. M. Olson, & M. P. Zanna (Eds.), *The psychology of values*. (pp.1-24). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Spranger, E. H. (1921). *Lebensformen: Geisteswissenschaftliche Psychologie und Ethik der Persönlichkeit*. 2. Aufl. Tübingen: Max Niemeyer Verlag. (伊勢田耀子(訳) (1961). 文化と性格の諸類型 明治図書)
- 都筑 学 (1984). 小中学生の価値意識の分析 心理科学, 7(2), 1-10.
- 辻岡美延・村山 繁 (1975). 価値観の六次元——因子的真実性の原理による尺度構成—— 関西大学社会学部紀要, 7(1), 161-174.